

パチンコの原点を見つめて 名古屋の「正村資料館」を訪ねました

中部支部事務所長 眞野年之



春がやってきました、新年度の始まりです。私もこの4月で中部支部に参りまして4年目を迎えます。当初は、日遊協の活動内容も良く判りませんでしたが、その頃はちょうど東日本大震災から1年経ったところで、日遊協のボランティア隊の方による被災地への派遣が再開されたという広報誌の記事を見たり話を聞いて日遊協を始めとした業界の活動に感動したことを覚えていきます。



京楽産業の「パチンコミュージアム正村資料館」

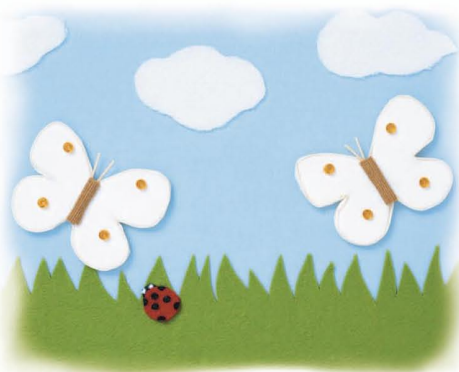
いま業界は、遊技人口が1000万人を割り、ファン減少に歯止めがかからず、最近ではパチンコ店における依存(のめり込み)問題、置引き対策など様々な課題が持ち上がり、これに対して業界は、日遊協庄司会長を始め、遊技産業活性化委員会の指針が示され具体的な取り組みがなされているところで、支部としても対策を進めているところでもあります。

その中で、ファンの気持ちを知ることが大切な事と思えますが、日遊協の行ったファンアンケートで「台選びのポイント」の中「演出の面白さ」上位を占めています。

した。支部の役員会でも時々「面白い台は作れないのかな」とか「昔のような手打ちの台は無理だよな」という話が出ます。話によれば北陸の温泉宿の遊び場には今でも手打ちの台が数台あるという話を聞きました。先人の方たちはどんな面白いパチンコ台を考え、作ったのかと気になりました。

そこで、名古屋市天白区にありますが京楽産業さんの「パチンコミュージアム正村資料館」に足を運んでみました。現代パチンコの生みの親といわれる正村竹一氏の貴重な資料を受け継いだ京楽産業が、名古屋市天白区の本社に隣接する社屋を改装して展示されているものです。

資料室の2階には、昭和21年制作のパチンコ台から昭和55年のフィーバーの台等25台あまりの、それぞれの時代を生き抜き多くの人に親しまれた、大衆娯



楽の原点が見えるような気持ちにさせられる台が展示されています。なかでも珍しいと思ったのは、昭和52年に制作された「テレビパチンコ」という、台の中のテレビを見ながら、ヘッドホンで音を聞きながらパチンコをするという台でした。もう1台は、昭和25年に制作された手打ちのオール15というという台。実際に手打ちで玉を1個打ってみました。天井から玉が釘にはねられて下まで玉が飛び跳ねるように落ちてきます。入賞口には入りませんでした。途中の玉の動きがとても楽しく、ワクワクする、シンプルな1台でした。

他にも、お客さんに喜んでもらうために工夫された面白い台がいくつもありました。いまの時代にこの時の台がそのまま使えるとは思いませんでしたが、現代風にアレンジした復刻版のコーナーがホールにあっても楽しいかなと素人ながらに思った、原点を見つめる空間でした。一度足を運んでみてはいかがでしょうか。